

# 韓半島沖積平野における青銅器時代集落遺跡の立地

張 祐 榮

## — 論 文 要 旨 —

韓国における考古学と地理学の研究方法を用いた沖積平野に立地する遺跡の研究は、緒についたばかりである。本稿での研究対象地域は、韓半島における青銅器時代（BC 13c-BC 5c）の沖積平野に立地する遺跡とし、「地形環境分析」を用いて地形と遺跡立地との関係性を検討した。その結果、青銅器時代における集落遺跡は、自然堤防、扇状地あるいは河岸段丘上に立地するパターンが多いことが指摘された。

キーワード：韓半島，青銅器時代，沖積平野，集落遺跡，地形環境分析，遺跡立地

## 1. はじめに

韓半島の大規模開発によって、沖積平野でも青銅器時代の集落が確認されるようになった。その結果、丘陵や山地に比べて調査が少なかった（兪・李，2011）沖積平野（李，2007）からも、大規模な自然堤防や、扇状地に立地する青銅器時代集落が検出されはじめた（李，2008）。この沖積平野では、自然科学分析が実施されているが、これまで韓国の遺跡発掘調査では、自然科学分析結果が積極的に報告書や論文で活用されることは少なかった。また、自然堤防などの短期間に形成された地形から、青銅器時代の大規模集落が調査されてきたが、考古学的検討に地理学的手法を用いた研究はなされてこなかったと言える。

しかし、近年増加した沖積平野の発掘調査で、地表面では確認が難しい埋没地形から青銅器時代の大規模集落が確認されはじめた（李，2008）。したがって、沖積平野に立地する遺跡の考古資料と地形に関する自然科学分析について記述された報告書を使用し、遺跡と地形との関連性の検討は重要である。

以上のことより、本稿の目的は、微地形分類に基づく、韓半島の青銅器時代集落の立地について検討することである。沖積平野に立地する青銅器時代の集落が形成された地形形成の背景とその環境について考古資料と地形分析の結果を中心に考察を行う。

## 2. 研究史の整理

2000年代以降、各地の調査成果とともに青銅器時代の集落研究も活発になったが、遺跡立地に関する論考は少なく、集落遺跡の立地を研究するための方法論も開発されてこなかった。

具体的には、遺跡の存続時期を加味した地理学的な分析はこれまでなされてこなかった。

考古学と地理学の共同研究は、扇状地に立地する青銅器時代の集落に関する分析（李ほか，2006）、青銅器時代における湖西地域の錦江で氾濫等の堆積作用の影響を受けない丘陵に集落が立地し、平野部には遺跡が立地しないと指摘した研究（李，2000）もある。

これまでの考古学と地理学の集落立地における研究は、韓国において各学問の個別的な研究であった。集落の立地は考古学や地理学に重要なテーマで、両方の学問が意見を交換できる研究が必要と考える。

また本稿に関連のある論考としては、自然堤防の形成過程と遺跡の関係性を追求した研究（井関，1983）や、微地形分析から集落の構造を立体的に復原した研究などがある（高橋，2003）。また高橋は、遺跡が位置する

埋没微地形を分類するために、系統的な手法としての「地形環境分析」を提唱している（高橋，1993）。地形環境分析は、地形の形成を時間単位で区分した先行研究（Tricart，1965）を沖積平野に立地する遺跡の調査に適用した方法である。高橋は、沖積平野の地形の中で、河岸段丘は10000年単位、三角州と扇状地は1000年単位、自然堤防と後背湿地は100年単位、1回の水害による遺跡埋没プロセスは10年単位と分類し、地形を区分している（高橋，1993）。

したがって、集落を「居住を中心とした家屋集合体」ではなく、「居住を中心とした家屋集合体と生活に関わるすべての遺構・環境の総体」として認識し、その形成過程について研究を進めている（CHANG，2013；CHANG，2015）。

## 3. 研究対象地域

韓半島の沖積平野で大規模集落が立地するのは、自然堤防上が多い。自然堤防に位置する遺跡では、そのほとんどが新石器時代（BC6000年）から原三国時代（AD 3世紀）までの文化層が存在する。この中で青銅器時代の沖積平野に立地する遺跡を研究対象とする（図1）。

### （1）韓半島青銅器時代の概要と時期区分

韓半島の青銅器時代は、定住農業、磨製石器の導入、社会的複雑性の発達によって特徴づけられる。青銅器時代の時期区分は、2分期説（林，1969；後藤，1973；李，1974；李，1996）と3分期説（藤口，1986；安，1996；安，2000）に区分される。2分期説は、韓半島の青銅器時代を、前期（可楽洞類型、驛三・欣岩里類型）と後期（松菊里類型）に、3分期説は、前期（可楽洞類型、驛三・欣岩里類型）、中期（松菊里類型）、後期（粘土帶土器文化）に区分している。2000年代初頭までは3分期説が韓国考古学で定説であったが、後期に区分さ

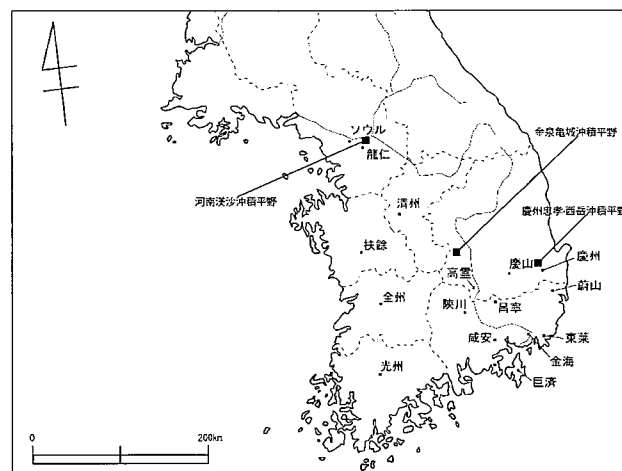


図1 沖積平野の位置

表 1 韓半島青銅器時代の時期区分 (李ほか, 2011)

青銅器時代 前期 BC13c ~ BC10c	可楽洞 (Garak-dong) 類型 驛三洞 (Yeoksam-dong)・ 欣岩里 (Heunam-ri) 類型
青銅器時代 後期 BC10c ~ BC5c	松菊里 (Songguk-ri) 類型

れた粘土帯土器が松菊里類型の段階からその後の初期鉄器時代まで存続するため、青銅器時代の時期区分において独立した時期として認定することができない (李, 2006)。そこで本稿では 2 分期説を韓半島青銅器時代の時期区分の基準として用いる (表 1)。

## (2) 韓半島第四紀地層の層序

韓半島は約 70% が山岳地帯で、30% が第四紀の沖積層に覆われているが、山岳地帯の中でも山麓や低丘陵の大部分は第四紀の堆積層や斜面崩積土が堆積する。韓半島では山岳水河はなかった一方、主に間氷期に形成された堆積層が発達しているのが特色である。内陸では谷を充填している完新世の沖積層が基盤岩を不整合的に被覆し、更新世地層は海岸に沿って海水面の変動によって形成された段丘地層が発達する。海岸と接している河岸では海岸段丘と関連する河成堆積層が発達している。したがって韓半島は、間氷期に海水面の上昇を伴う堆積が、氷河期には海退による侵食作用が起こった地域である (朴, 2001) として位置づけることができよう。

### 地形立地別の遺跡分類と特徴

韓半島の沖積平野遺跡を地形別に分類した研究 (兪・李, 2011) では、河岸段丘タイプ・扇状地タイプ・谷低平野タイプに区分する。自然堤防は河川の形態から、滑走斜面タイプ・直線タイプ・河川合流タイプに分類している。

**河岸段丘タイプ**：河岸段丘は過去の河床が現在の河床より高度に位置する場合であり、韓半島の中下流地域では氾濫源と識別が難しい例が多い (權, 2006)。段丘面の後背に丘陵と上位の段丘が位置する立地関係が、判断材料として挙げられる。例として金泉松竹里遺跡 (金, 2007) がある。

**扇状地タイプ**：扇状地タイプでは、扇央から扇端に集中して遺跡が確認される。扇央で伏流し、扇端部で湧水する理由で、集落は湧水帯に沿って分布する。慶州忠孝洞遺跡 (韓国文化財保護財團, 2009; 新羅文化遺産調査團, 2009)、金海余來里遺跡 (郭, 2009) が扇状地タイプに立地する。

**谷低平野タイプ**：丘陵と丘陵の谷間や、傾斜変換点以下の平野部が、丘陵からもたらせた堆積物によって平坦化した地点に相当する。谷低平野タイプでは先史時代よりも三国時代の遺跡の検出例が多い。三国時代から人口の増加に伴った集落立地の多様化の結果と推測される。谷低平野タイプの立地から古墳群が確認される例が多い。昌寧桂城里遺跡 (郭, 2008) が谷低平野形立地に該当する。

### 自然堤防

**滑走斜面タイプ**：河川周辺では先史時代・歴史時代両方の遺跡が確認されている。河道が急激に曲流して河川の湾曲部の内側が河道の側方移動によって緩斜面となっている滑走斜面部に立地する類型である。蛇行の程度が激しくなったら流水の流れが反対側の攻撃斜面部より遅く、洪水の時も流水の直接的な浸食から離れるため被害が少なく、氾濫の時の避難にも有利である。蔚山立岩里遺跡 (金・崔, 2010) が滑走斜面タイプの自然堤防上に立地する。

**直線タイプ**：滑走斜面形より蛇行の度合いが緩い自然堤防状の地形である。河川流路の変更で位置を変更するため、河川周辺の自然堤防が流失する事例がある。また河川沿いの青銅器時代遺跡層が流失する例もある。河南漢沙里遺跡 (尹・李, 1994) と光州東林洞遺跡 (李・朴, 2007) が直線タイプの自然堤防上に立地する。

**河川合流タイプ**：河川の合流する地点付近の自然堤防上に立地する場合である。この場合大河川 (江) と小河川 (川) が合流する例が多い。旌善アウラジ遺跡 (江原文化財研究所, 2006) が典型的な類例である。

## 4. 研究方法

沖積平野は、自然や人間の影響を長期間受けてきたため、本稿が対象とする青銅器時代の地形と現地形とは一致していない。したがって、沖積平野に立地する遺跡の発掘調査の際は、古環境分析の手法や平野全般の地形に関する知識が必要であり、調査地点の周辺環境に関する検討も行う必要がある。

このような理由から、沖積平野の遺跡を調査するには、地質学・地形学・土壌学・第四紀学などの知識が必要である。本章では、遺跡が立地する地形を分類するために効果的な地形環境分析 (高橋, 1993) の方法論とその特性を提示する。

地形環境分析 (高橋, 1993) には、5 段階の下位分析 (sub-analysis) があり、本研究ではこの分析手法を適用した。

**地形域環境分析：**100000年単位で陸地・海を区分し、山地・丘陵・平野の分布状況を地理学的手法で分析する。国土地理院が発行した50000分の1地形図や200000分の1地形図、衛星画像、地質図・土壌分布図・植生分布図を使用した。

**地形面環境分析：**10000年単位で環境変化と関連した地形面を区分し、沖積平野で河岸段丘・完新世段丘・氾濫原の形成過程を地理学的手法で分析する。調査方法は、国土地理院が発行する25000分の1地形図を使用し、航空写真の判読は20000分の1の航空写真を使用する。さらに、現地でボーリング調査を行い、地質・地形断面図も作成する。

**地形帯環境分析：**微地形の集合体である地形帯を分析する過程で、1000年単位で三角州・扇状地を区分し、地形帯を調べる。この分析過程では、国土地理院が発行する5000分の1地形図と10000分の1航空写真を使用し、現地調査、地質断面図、土地利用図を用いて調査を行う。

**微地形環境分析：**地形環境分析の独自の方法で、100年単位で地形の変化を調べる方法である。それらは、地

形学で明らかにされた地形とは異なる様相を呈する。微地形は、自然堤防や旧河道、ポイント・バーがある。5000分の一航空写真を解析し、現地調査も行うことで自然堤防と旧河道を分類する。地形環境分析は発掘調査以前から実施し、埋没微地形についても検討する。この段階では、試掘坑の数と試掘坑を入れる方向、深さを決める。試掘調査中は、地層の堆積を観察し、埋没した微地形の数やその埋没プロセスを観察する。

**自然堤防の分類：**自然堤防Aは、河川本流に隣接している。この自然堤防は長い船形の地形で、地表面でも露出している。自然堤防Bは、自然堤防Aに比べて相対的に規模が小さい自然堤防である。その形態は長い島形の地形で、旧河道の流れる形と方向性が関係し、地表面では確認が難しい埋没した地形である（図2）。また、自然堤防の中で、本流側の斜面部を前斜面、中央を中央部、後背湿地側の斜面を後斜面と呼ぶ。

**旧河道の分類：**旧河道は、氾濫原・段丘・扇状地・三角州上にあった河川の機能が喪失した地形である。旧河道は後背湿地に変わる可能性があり、洪水時は氾濫した水が通る可能性の高い地形である。なお、水が流れた量が多く、河川の機能を長い時間保ち、現地表面でも確認

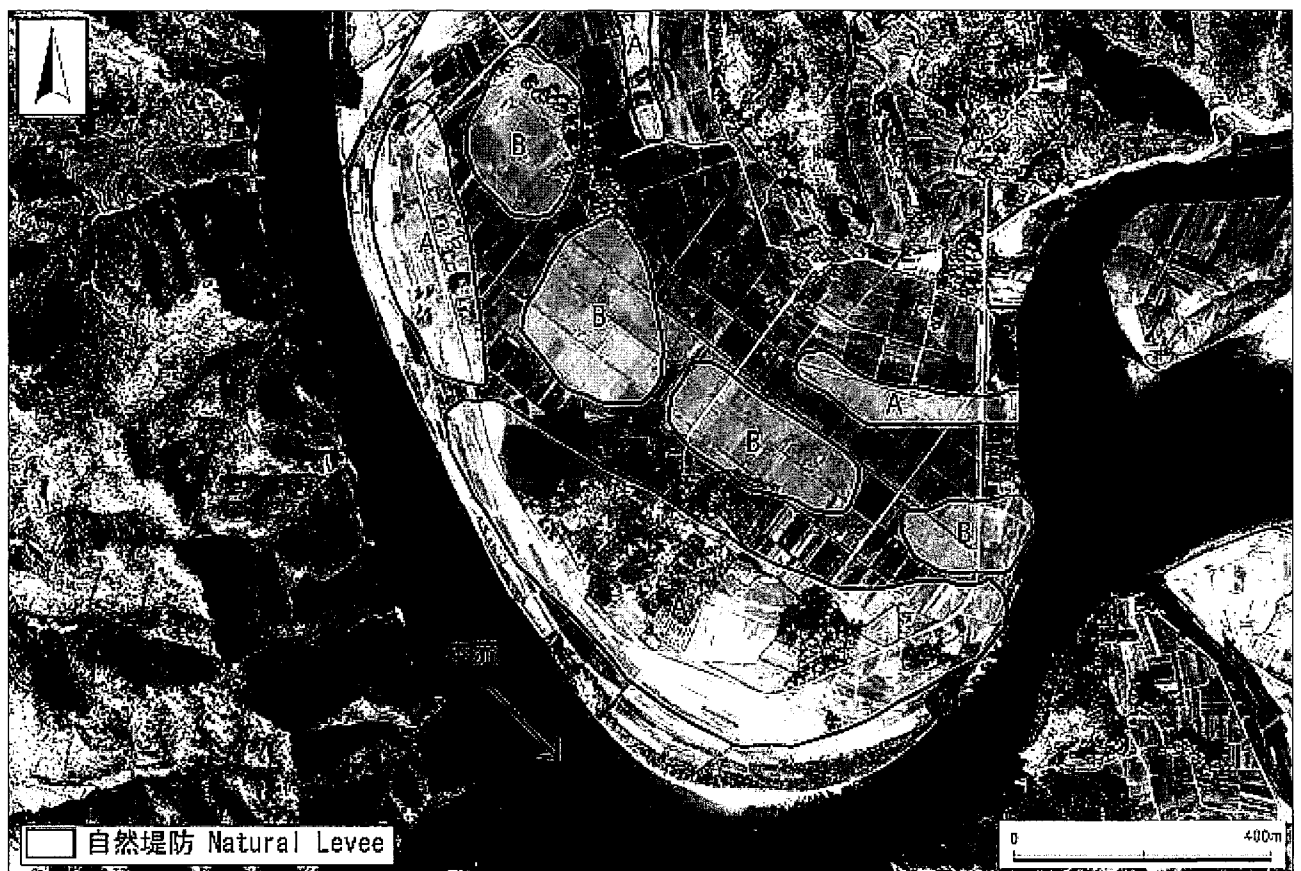


図2 自然堤防AとB (CHANG, 2013)

できる旧河道を「旧河道1」、旧河道1に対して相対的に河道の時間が短く、埋没状態の旧河道を「旧河道2」と呼ぶ。

**極微地形環境分析：**一回の氾濫で形成された堆積物によって形成された最小単位の地形であり、10年単位で地形の変化を調べる方法である。この地形は、2500分の1地形図や発掘調査によって確認することができる。本格的な発掘調査とともに、旧地表面から土地利用の状況等を検討する。

## 5. 沖積平野の地形環境分析と集落遺跡分析

本章では、青銅器時代の韓半島で遺跡が立地する沖積平野の微地形環境分析を中心として試みる。1960年代の航空写真には、自然堤防や旧河道など、微地形環境分析で分類する地形が地形図よりよく確認できる。ここでは、微地形を区分するために航空写真判読をもとに地形を分類する。航空写真と地形図との位置情報を合わせるため、ArcGISを用いて補正作業を行った（張ほか、2010）。航空写真判読のみでは、現地形環境を反映しておらず、青銅器時代の地形環境とは時期的なヒアタスが生じている。この点を補正するために、青銅器時代の集落の立地を検討する。なお、各遺跡の遺構名は、報告書の記載に準拠する。

### （1）金泉亀城沖積平野と松竹里の立地環境

#### 地形分類

金泉亀城は、慶尚北道を流れる洛東江支流の甘川（Gam River）に位置し、ソウルから南東へ約180kmの地点にある（図1）。亀城は、甘川が山地を曲流することで形成された谷底平野である。亀城の地形は、河岸段丘、扇状地、自然堤防、旧河道2に分類することができる。甘川を本流として断層を確認すると、「本流－自然

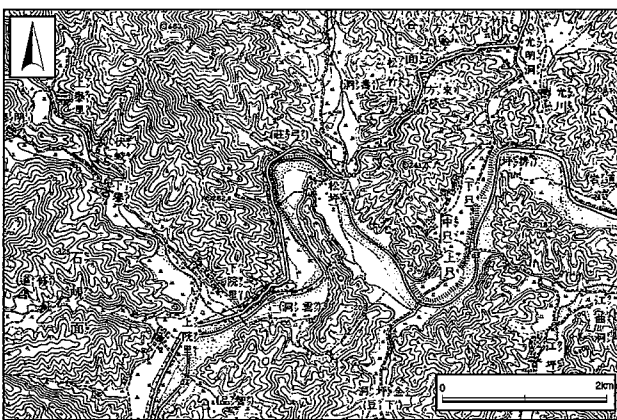


図3 金泉亀城沖積平野の地形図。1918年発行50000分の1

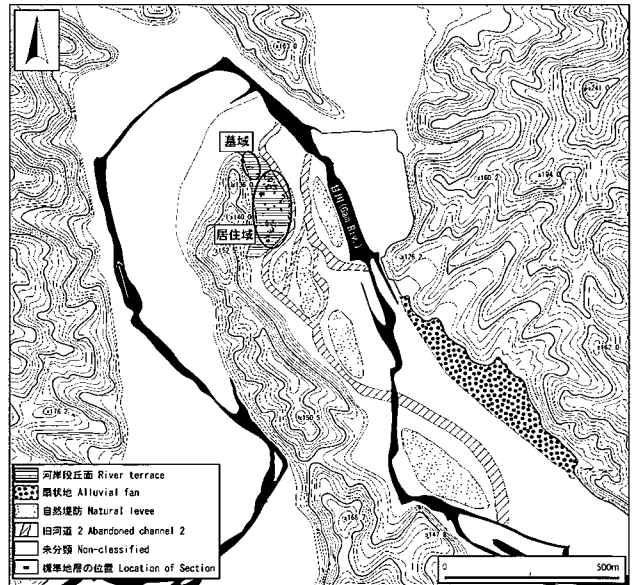


図4 金泉亀城の地形分類と松竹里遺跡の地形環境。韓国国土地理院発行20000分の1航空写真と5000分の1地形図を使用

堤防－旧河道2－自然堤防－旧河道2－後背湿地－河岸段丘－山地」となる（図4）。まず、本流左岸に隣接して自然堤防Aが形成されている。自然堤防の西側には、旧河道2が形成されている。旧河道2の西側には、自然堤防と旧河道2が位置し、自然堤防上に水田が広がっている。旧河道2の西側には、河岸段丘が形成されている。この河岸段丘は、段丘直下の地形（自然堤防・旧河道2）とは、異なる時期に形成されたと考えられる。河岸段丘の後背には、斜面を東に向く山地がある。また、甘川の東側に位置する平野部では、「自然堤防－旧河道2－扇状地－山地」の断面が確認できる。

#### 松竹里遺跡の立地環境

金泉亀城沖積平野に位置する松竹里遺跡の周辺には、甘川に流入する支流を中心に支石墓群（谷低平野・丘陵に立地、青銅器時代）と立石（支石墓の周辺に位置、青銅器時代）、集落（断崖や段丘面上に立地、新石器～青銅器時代）の調査例がある。松竹里遺跡は、29,752㎡の範囲から青銅器時代（前期～後期）の居住域、墓群（前期末～後期）、統一新羅時代の住居址、高麗時代の石槨墓、朝鮮時代の溝が調査された。遺物は、無文土器、石器類、琵琶形銅剣、玉類、木製鋏などが出土している。本稿では青銅器時代の居住域（住居址61棟）と墓域（支石墓19基）について検討する。遺跡の堆積は曲流河川によって形成された谷底平野に立地しているので河川の氾濫に伴う旧地表面の流失と堆積が繰り返して確認される一方で、後背の西側の突出野山からの砂質土の堆積があり、全体的には西から東に微弱な傾斜をみせる平坦な台

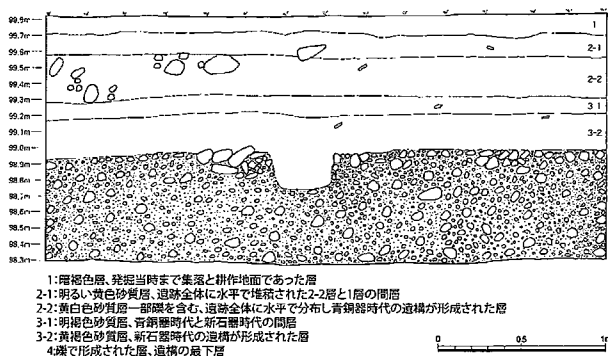


図5 松竹里遺跡の標準地層（金ほか，2007を修正）

地であった（図5）。松竹里遺跡の居住域と墓域は、河岸段丘面上に位置している。居住域で出土する石器類から、この集落で狩猟、採集、漁労、畑作と伐採が行われたことが分かり、河川と山地からの様々な資源を利用したと推定され、青銅器時代前期から後期まで農耕の比率が次第に増加して集約化する傾向が確認できる（金ほか，2007）。前期住居址の $^{14}\text{C}$ 年代測定の結果が $2910 \pm 60\text{BP}$ 、較正（暦）年代が $1270\text{cal BC}-920\text{cal BC}$ であり、後期の住居址は $2500 \pm 70\text{BP}$ で、較正（暦）年代が $810\text{cal BC}-400\text{cal BC}$ であった。墓域（支石墓群）は、地上式で集落の北西側に位置する。4号支石墓の前の地山に突き刺さった状態で出土した琵琶形銅剣は、他の支石墓出土遺物と総合して推定した年代が青銅器前期末まで遡る資料である。甘川の西側には、自然堤防が位置する。自然堤防の後方には旧河道2があり、河岸段丘が形成されている。この河岸段丘面上に松竹里遺跡がある。なお、遺跡の後背には、山地から下る急斜面が位置する。甘川の東側にも、松竹里遺跡と類似した「本流－自然堤防－旧河道2－扇状地」という断面が存在する。松竹里遺跡から青銅器時代の大規模な集落が存在することから、この地点にも集落が営まれていた可能性がある。

## （2）慶州忠孝・西岳沖積平野と忠孝洞遺跡の立地環境地形分類

慶州忠孝（Chunghyo）・西岳（Seoak）は、慶尚北道を流れる兄山江（Hyeoungsan River）流域に位置する。ソウルから南東へ約275km、大邱から東へ約55kmの地点にある（図1）。忠孝は、狭隘な谷部にあり、西岳は、兄山江の左岸にある（図6・7）。忠孝・西岳の地形は、扇状地、自然堤防、旧河道2に分類することができる。兄山江を東に据えて忠孝・西岳の断面を西に向かって確認すると、「本流－自然堤防－旧河道2－自然堤防－旧河道2－後背湿地－扇状地－山地」となる（図7）。本流左岸には、旧河道2に開析された自然堤防が隣接している。自然堤防の西側には、旧河道2が位置している。これらの旧河道は、さらに西側に位置する自然堤防の間

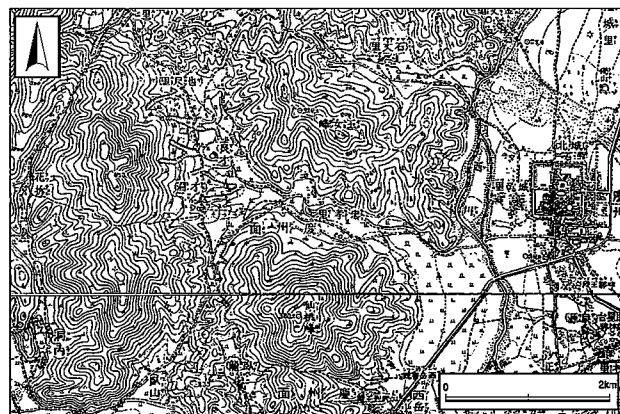
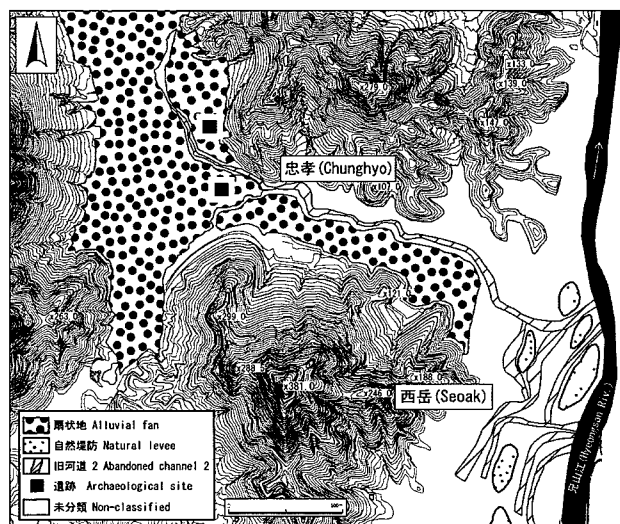
図6 慶州忠孝・西岳沖積平野の地形図。  
1918年発行50000分の1地形図を使用

図7 慶州忠孝・西岳の地形分類と忠孝洞遺跡の地形環境（李・高橋，2008に加筆）。韓国国土地理院発行20000分の1航空写真と5000分の1の地形図使用

を流れていた。旧河道2の西側には、自然堤防と旧河道2があり、自然堤防・旧河道2の西側には、扇状地が広範囲に広がっている。扇状地の後背には、急斜面の山地が形成されている。

### 忠孝洞遺跡の立地環境

慶州忠孝・西岳沖積平野に位置する忠孝洞の周辺には、忠孝洞支石墓（谷低平野・扇状地に立地、青銅器時代）と忠孝洞古墳群（丘陵の尾根上に立地、三国時代から統一新羅時代）、忠孝洞寺跡（山地・丘陵の尾根上に立地、高麗時代から朝鮮時代）などの遺跡が分布している。忠孝洞の周辺は、西岳沖積平野の西側にある山地の丘陵末端と扇状地が発達している。

忠孝洞遺跡は、49,456㎡の範囲から青銅器時代（前期～後期）の集落、三国（新羅）時代から統一新羅時代の道路遺構などの遺構と無文土器、石器、新羅土器な

どの遺物が出土している。本稿では青銅器時代の居住域（住居址45棟）について検討する。住居域は、大部分が扇状地の扇頂部に位置している（新羅文化遺産調査団, 2009）。南に位置する1号住居址（青銅器時代前期）の標高は58.5mで、北側の34号住居址（青銅器時代前期）の標高は55.5mであった。後期の住居も同じ形で位置している。このことから、扇状地面は北へ傾斜していることが確認できる。<sup>14</sup>C年代測定の結果は報告されていない。

この沖積平野では、扇状地、自然堤防、旧河道2が検出された。まず、本流に隣接した地点では、後世の旧河道によって開析された自然堤防がある。ここでは、遺跡の発掘調査がされておらず、今後の調査で遺跡が確認される可能性がある。その後背には、旧河道2と自然堤防がある。この部分も前述の自然堤防と形態的に類似しており、今後、遺跡が発見される可能性がある。

### (3) 河南漢沙沖積平野と漢沙里遺跡の立地環境

#### 地形分類

漢沙里（Misa-ri）は、韓半島中部を流れる漢江（Han River）下流に位置する。ソウルから東へ約10kmの地点にある（図1）。漢沙沖積平野は、南は河南市と接し、北は九里市と接している。漢沙は沖積平野の中にあり、漢江の流路が東南から北西へ変わる地点に位置する中洲の地名である（図8）。

漢沙の地形は、河岸段丘（段丘面上の自然堤防・旧河道）・自然堤防A、B・旧河道1, 2に分類することができる。漢江を東に据えて漢沙の断面を観察すると、「漢江本流－河岸段丘－自然堤防A－旧河道2－自然堤防B－旧河道2－自然堤防B－旧河道1－自然堤防A－後背湿地－河岸段丘（自然堤防・旧河道）－山地」という様相が確認できる（図9）。まず、漢江本流に隣接して比高のある河岸段丘があり、その上に自然堤防Aが形成されている。この自然堤防は、段丘面の下側に立地する地形とは形成時期が異なる。

自然堤防Aの西側には、旧河道2が流れている。この旧河道を詳しくみると、自然堤防Bの間を流下している。現在の河川とは異なり、小河川が網状に流れていた。

旧河道2と自然堤防B群がある位置から西側には、旧河道1が南から北へ流れていた。旧河道1は、旧河道2よりも現在の河川と類似した形態となることから、旧河道1の間にある自然堤防が形成された時期や環境が他の自然堤防（旧河道2と関係する自然堤防群）とは、異なるものと推定される。

上述した地形からさらに西側には、自然堤防B、旧河道2、自然堤防Aが立地している。現在では、自然堤防A上に集落が形成されている。集落の西側には河岸段丘があり、その地形面上には、中洲が形成されている。その西側には、河岸段丘がもう一つ存在し、河岸段丘上に

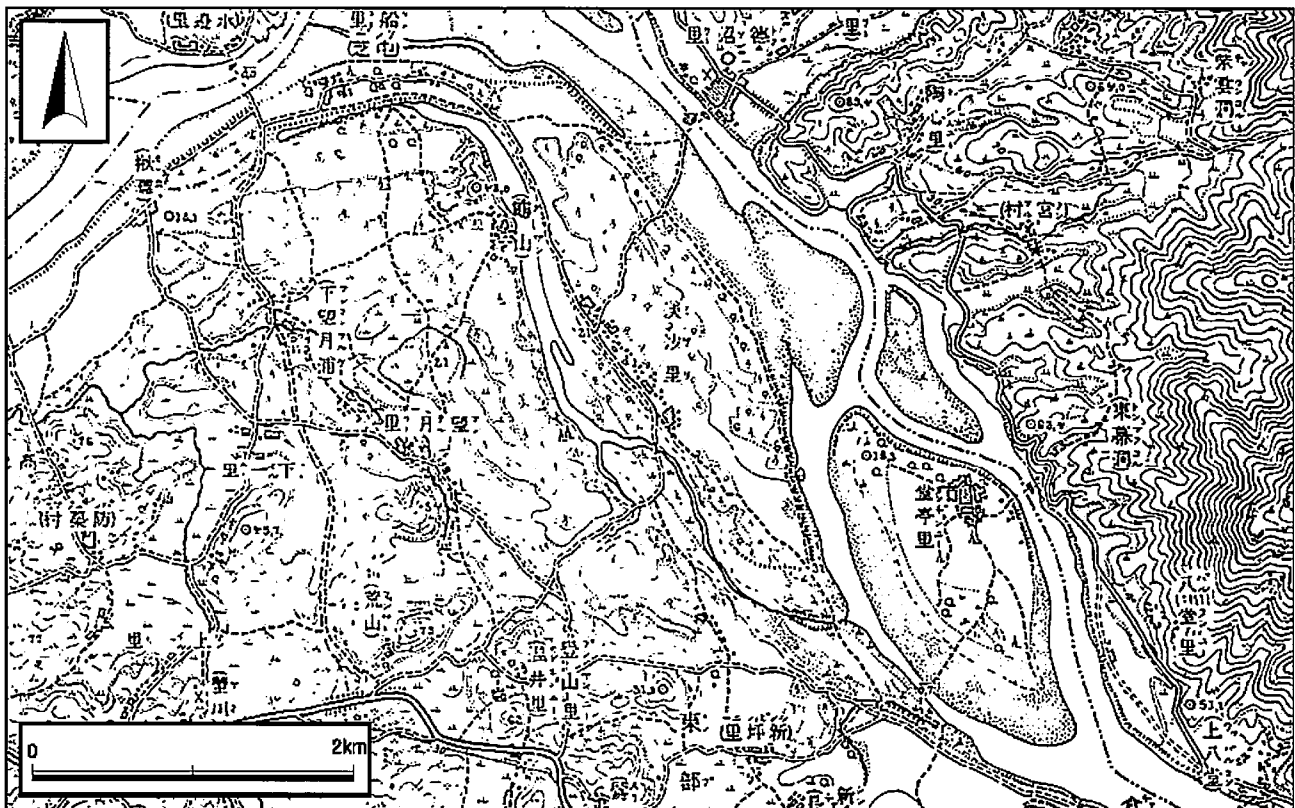


図8 河南漢沙沖積平野の地形図。1918年発行50000分の1地形図を使用



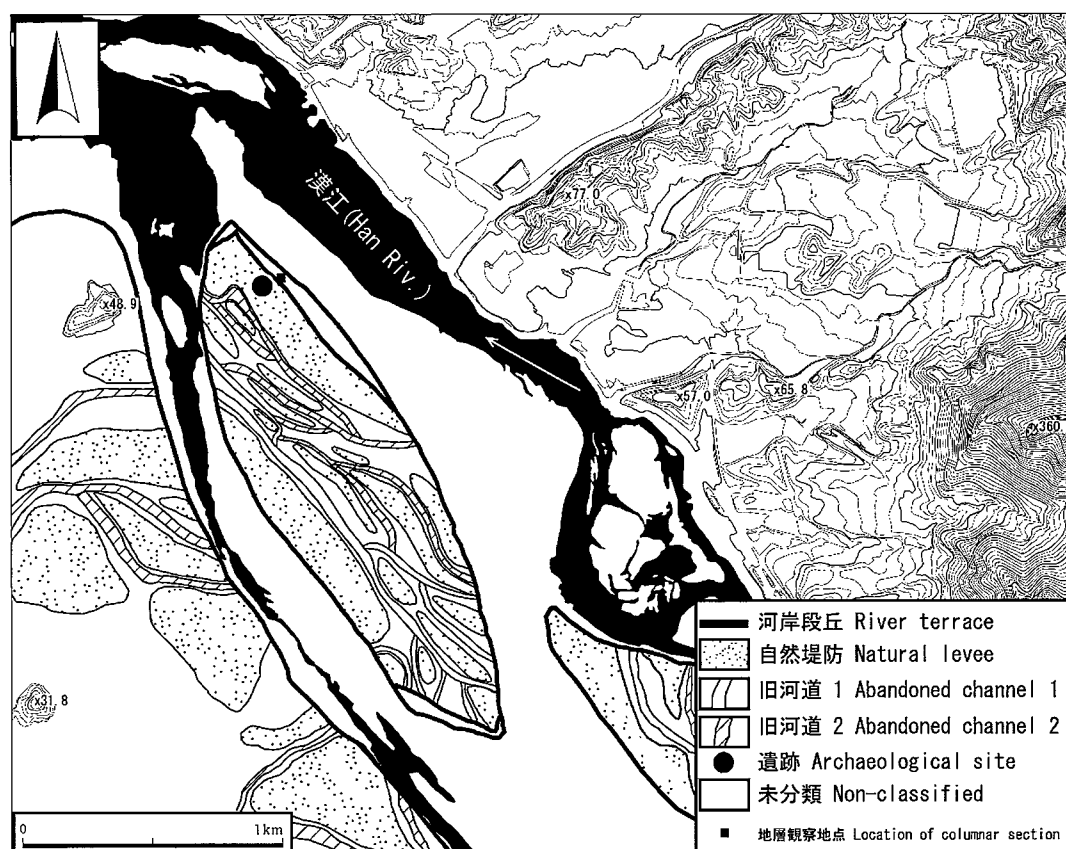


図9 河南漢沙沖積平野の地形分類と漢沙里遺跡の地形環境。  
韓国国土地理院発行 5000 分の 1 航空写真と 5000 分の 1 の地形図使用

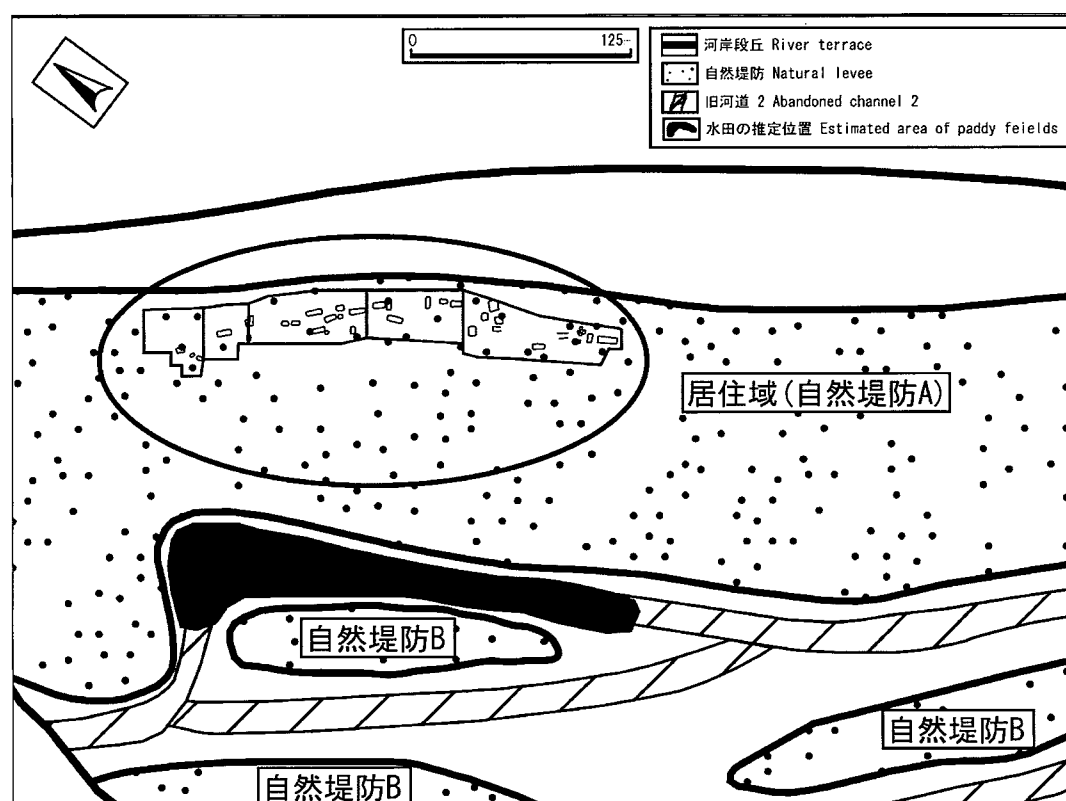


図10 漢沙里遺跡の地形環境と水田の推定位置



は、先述した中洲内に形成された地形とは異なる時期の自然堤防や旧河道が立地する。

### 漢沙里遺跡の立地環境

河南漢沙沖積平野に位置する漢沙里の周辺には、漢江北岸の東幕里遺跡（河岸段丘上に立地、新石器時代）、水石里遺跡（山地に立地、新石器～青銅器時代）、漢江南岸南西側の岩寺洞（河岸段丘上に立地、新石器～青銅器時代）、可樂洞遺跡（丘陵上に立地、新石器～青銅器時代）が位置する。また、夢村土城、風納土城、石村洞古墳群、芳夷洞古墳群、可樂洞古墳群など三国時代の遺跡が密集している。

漢沙里遺跡は、26,364㎡の範囲から青銅器時代（前期～後期）の集落、原三国時代から三国（百濟）時代の集落や耕作遺構などが、無文土器、石器類、原三国土器、百濟土器などの遺物とともに出土している。本稿では青銅器時代の居住域（住居址38棟）について検討を試みる。

河南漢沙沖積平野に位置する漢沙里遺跡は、中洲に立地している遺跡として報告されている（尹ほか、1994）。

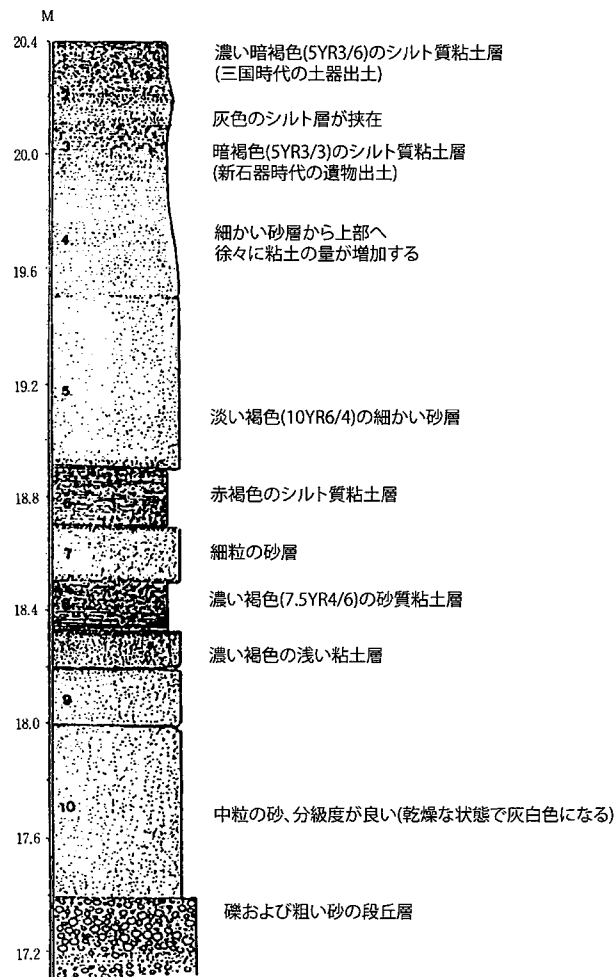


図 11 漢沙里遺跡の柱状図（崔ほか、1994 を編集）

しかし、今回の地形分類で確認した結果、漢沙里遺跡が位置するこの中洲内には、さらに微地形が存在していた。この中洲は、自然堤防や旧河道等が漢江によって侵食を受ける過程でその一部が段丘化したものであり、この中洲に残った自然堤防上に、集落が形成されている（図10・11）。漢沙里遺跡には、自然堤防 A が 2 列、自然堤防 B が複数列ある。新石器～青銅器時代の集落が同じ層で検出された漢沙里 A 地区は、その大部分が自然堤防 A 上に立地する。住居址は、自然堤防 A 上の中央部に位置し、その標高は、東西を基準にしてみると、青銅器時代前期の A 1 住居址（崇實大学校調査区）が 19.3m、A 8 住居址（崇實大学校調査区）が 19.4m であることから、高低差はほとんどない。これは居住域が自然堤防 A の中央部に位置しているためと考えられる。ただし、南北を基準にしてみると、青銅器時代前期の A 住居址（崇實大学校調査区）が 19.4m、KC-034 住居址（高麗大学校調査区）が 19.11m であることから、南から北へ緩やかに地形が下がっていることがうかがえる。青銅器時代後期の住居址も同じ様相で位置する。<sup>14</sup>C 年代測定の結果は報告されていない。

また、集落が立地する自然堤防 A の後背に旧河道 2 が流れている。旧河道 1 より浅く確認される旧河道 2 は、洪水が起ると満水し、洪水が無い時期は後背湿地の状態となっている。このような状況から、集落が立地する自然堤防 A と後背に立地する自然堤防 B の間には、旧河道 2 が流れていたことが推定され、そこを水田として利用していたと考えられる。

近年では、漢沙里遺跡の青銅器時代前期の住居址から出土した土器に圧痕が残っており、その圧痕をレプリカ法で観察すると、これまでの調査で出土していなかったイネが確認されている（孫ほか、2010）。

漢沙里遺跡の居住域南側に表示された範囲は、青銅器時代の水田が営まれていた可能性の高い地点を示したものである。遺跡の追加調査を行う場合、自然堤防 A の中央部（集落全体が検出する可能性）と自然堤防の後斜面（耕作遺構と墓域が検出する可能性）、そして居住域の周辺の旧河道 2 から青銅器時代前期の水田が検出される可能性が高く、今後調査する必要があると言えよう。2002 年の試掘調査を参考にすれば、自然堤防 B 上にも青銅器時代や三国時代の遺跡が存在する可能性が指摘できる（崔、2002）。

## 6. 青銅器時代の沖積平野における集落の立地

青銅器時代の沖積平野に立地する集落の様相を概観してきた。青銅器時代の集落は、河川に隣接する自然堤防 A 上に集落を形成する傾向がある。自然堤防 A の後方

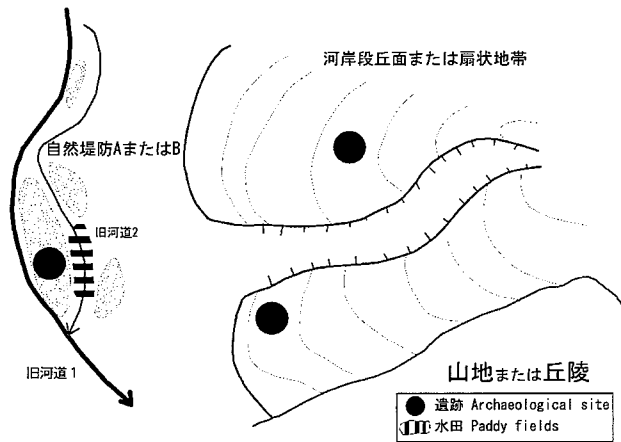


図12 韓半島の青銅器時代集落の立地パターン  
(CHANG, 2015を修正)

には、後背湿地と旧河道2と自然堤防Bが隣接する。また、山地に近い地点では、扇状地や沖積段丘、河岸段丘が形成されている。

これまで分析してきた3ヶ所の遺跡は、河岸段丘・扇状地・自然堤防上に立地しており、それぞれ青銅器時代と現在の地形環境とは異なる状態であったことが分かる。

韓半島の沖積平野に立地する青銅器時代の集落の一般的な断面を概観すると、「旧河道1－自然堤防A－後背湿地－旧河道2－自然堤防B－旧河道1あるいは2－段丘（河岸段丘あるいは完新世段丘）・扇状地－山地」となる。この傾向を模式的に表したのが、図12である。

沖積平野に立地する遺跡の地形環境を分析するには、ボーリング調査や等高線図の作成とともに、考古学的事実や自然科学分析の成果を総合的に取り入れて、検討する必要がある。このような分析を行うことによって、青銅器時代のヒトの活動と沖積平野の地形環境を復原することができる。

今後は、沖積平野における遺跡の形成プロセスと当時の地形、段丘や扇状地の利用状況、自然堤防上に立地する集落の時期差について、考察を深めていきたい。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、京都大学大学院の吉井秀夫教授には韓半島の青銅器時代から三国時代までの時期区分についてご指導をいただいた。地形分類と環境考古学については、立命館大学の高橋学教授にご教示いただいた。韓半島の地形については韓国慶熙大学校地理学科金恵玲氏に助言をいただいた。また、日本語翻訳では京都大学大学院考古学研究室の金宇大氏、荒田敬介氏、永恵裕和氏、浦蓉子氏、山本亮氏にご協力いただいた。ここに記して、これらの方々に厚く御礼申し上げます。

※本稿は筆者の修士論文（「青銅器時代沖積平野の集落遺跡分析」2010年度高麗大学校大学院）とIGU2013 Kyoto Regional Conferenceで発表した「An Analysis of Settlement Sites from the Korean Bronze Age Located on Alluvial Plains」を要約・修正したものである。

## 文献

- 安在皓（1996）無文土器時代集落の変遷－住居址を通じた中期の設定－。碩啓尹容鎮教授停年退任記念論業。碩啓尹容鎮教授停年退任記念論業刊行委員会，43-90。
- 安在皓（2000）韓国農耕社会の成立。韓国考古学報，43号，41-66。
- 朴龍安（2001）韓国の第四紀環境，37，서울大学校出版部。
- 張祐榮・李日榮・李弘鍾（2010）沖積平野遺跡調査のための地形環境分析の適用。韓国文化財調査研究機関協会。野外考古学，8号，81-126。
- Wooyoung CHANG（2013）An Analysis of Settlement Sites from the Korean Bronze Age Located on Alluvial Plains. IGU2013. Kyoto Regional Conference.
- Wooyoung CHANG（2015）Location of Settlement on Alluvial Plains During the Korean Bronze Age. International Perspectives in East Asian Archaeology.
- 崔楨蕊（2002）河南漢沙洞。世宗大学校博物館。世宗大学校博物館学術調査報告書。26冊，1-355。
- 後藤直（1973）南朝鮮の無文土器。考古学研究，19-3，251-279。
- 江原文化財研究所（2006）旌善アウラジ先史遺跡公園調査敷地2次発掘調査。1次現場説明会資料。
- 郭鍾喆（2008）昌寧桂城里遺跡。우리文化財研究院学術調査報告，8冊。
- 郭鍾喆（2009）金海余來里遺跡。우리文化財研究院学術調査報告，17冊。
- 權炯熙（2006）韓国の地形。106，한울アカデミー。
- 崔夢龍・李東瑛・申叔靜（1994）漢沙里遺跡の地質と出土土器の分析。漢沙里。漢沙里先史遺跡發掘調査圖。第1巻，615-663。
- 韓國考古環境研究所（2010）行政中心複合都市および地方行政地域（生活圏3-1・2）燕岐大坪里遺跡發掘調査。指導委員会資料集，1-20。
- 韓國文化財保護財團（2009）慶州忠孝洞遺跡。韓國文化財保護財團。学術調査報告書，第209冊，1-139。
- 藤口建二（1986）朝鮮無文土器と弥生土器。弥生時代の研究3。弥生土器I，147-162，雄山閣。
- 林炳泰（1969）漢江流域無文土器の年代。李弘植博士回甲記念韓國史学論業，5-754。
- 林炳泰・崔恩珠・金武重・宗満榮（1994）漢沙里。漢沙里先史遺跡發掘調査圖，第3巻，1-562。
- 井関弘太郎（1983）沖積平野。東京大学出版会，1-145。
- Jean Tricart（1965）Principles et Method es dela Geomorphologie. Paris: Masson, 1-496.
- 金權九・裴成熾・金才喆（2007）金泉松竹里遺跡II。啓明大学校

- 行素博物館。啓明大学校行素博物館遺跡調査報告，17冊，261-291。
- 金京和・崔守亨（2010）蔚山立岩里遺蹟。蔚山文化財研究院學術調査報告，第78冊。
- 李映徹・朴琇鉉（2007）光州東林洞遺蹟Ⅰ。湖南文化財研究院學術調査報告，第80冊。
- 李清圭・李珍柱・張順子（2006）大邱月城洞1275遺蹟嶺南大学校博物館，9-30。
- 李毅漢（2000）青銅器時代扶餘地方の自然環境と人間生活。大韓地理学会誌，第35巻第3号，489-501。
- 李弘鍾（1996）青銅器時代の土器と住居。5-224，書經文化社。
- 李弘鍾（2006）無文土器と弥生土器の実年代。韓国考古学報，60号，236-258，韓国考古学会。
- 李弘鍾（2007）松菊里型集落の空間配置。湖西考古学報，第17号，114-133。
- 李弘鍾（2008）湖西地域の考古環境。湖西考古学報，第19号，4-29。
- 李弘鍾・高橋学（2008）韓半島中西部地域の地形環境分析。高麗大学校韓国考古環境研究所學術業書第6巻，5-132，書經文化社。
- 李弘鍾（2009）古地形分析と活用。第6回埋藏文化財調査研究員教育。韓国文化財調査研究機關協會，69-80。
- 李弘鍾・許義行・朴相潤（2011）青銅器時代遺物集成。韓国考古環境研究所學術業書，第9冊，349-406，書經文化社。
- 任孝宰・崔鍾澤・林尚澤・吳世筵（1994）漢沙里。漢沙里先史遺跡發掘調査團，第4巻，1-418。
- 李白圭（1974）京畿道出土無文土器磨製石器。考古学，第3号，5-102。
- 漢沙里先史遺蹟發掘調査團（1994）漢沙里，第1巻，1-672。
- 漢沙里先史遺蹟發掘調査團（1994）漢沙里，第2巻，1-434。
- 孫峻鎬・中村大介・百原新（2010）複製（replica）法を利用した青銅器時代土器圧痕分析。野外考古学，第8号，5-34。
- 新羅文化遺産調査團（2009）慶州忠孝洞都市開発事業地区遺跡。新羅文化遺産調査團調査研究叢書，第19冊，265。
- 高橋学（1993）地形分析からみた弥生時代の環濠集落－「もの」の科学から「地域」の科学へ－。山田安彦教授退官記念論文集記念会編。転換期に立つ地域の科学，45-54，古今書院。
- 高橋学（2003）平野の環境考古学，162-171，古今書院。
- 俞炳瑋・李玟경（2011）沖積地遺跡の立地分析と活用。野外考古学，第10号，73-118。
- 尹世英・李弘鍾（1994）漢沙里。漢沙里先史遺跡發掘調査團。第5巻，1-447。
- 【張 祐榮：〒606-8501 京都市左京区吉田本町京都大学文学研究科研修員考古学研究室 E-mail: dfcwooyoung@gmail.com】

